

各関係機関団体の長  
各病害虫防除員 } 殿  
農業資材販売等関係者

福岡県病害虫防除所長

平成18年度病害虫発生予報第8号(11月)について

このことについて、病害虫発生予報第8号を発表したので送付します。

予報第8号

向こう1か月間の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	発生現況	発生予報	
		平年比	平年比	前年比
イチゴ	炭疽病 ハダニ類	並 並	やや多 やや多	並 やや少
野菜共通	ハスモンヨトウ ミナミキイロアザミウマ コナジラミ類	やや多 多 並	やや多 多 並	やや多 多 並

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

気温は平年より高いでしょう。降水量、日照時間はいずれも平年並でしょう。

週別の気温は、1～2週目は高く、3～4週目は平年並か高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	30	50
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区気象台 平成18年10月27日発表抜粋)

## 作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

### 【野菜】

#### 1 イチゴの炭疽病

##### (1) 予報の内容

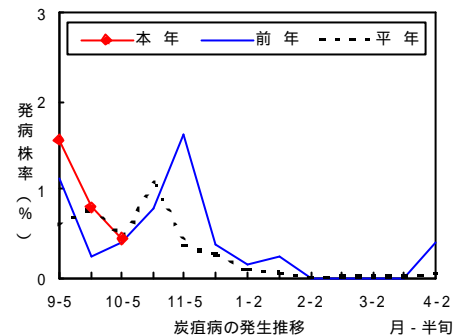
発生量：平年よりやや多く、前年並

##### (2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査結果（ ± ）

発病株率 0.4%（平年 0.5%、前年 0.4%）

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並である。（ + ）



##### (3) 防除上の注意

ア ビニル被覆後のハウス内温度の上昇で潜在感染株が発病しやすくなる。また、着果負担などの株へのストレスは発病を助長する。発病株は、残さを残さずに周囲の土ごと掘り取り、焼却するかビニルで完全に包み込み、周辺株への胞子の飛散を防止する。

イ ほ場の排水やハウスの換気をはかり、多湿にならないようにする。

ウ 窒素質肥料を多用しない。

##### (4) 次作の健全親株確保に向けた対策

ア 炭疽病が発生した苗と一緒に育苗した親株用の苗は、次年度に持ち越さず親株を更新する。

イ 親株が不足した場合は、定植株から秋期に採苗し親株として育成する。

ウ 採苗は、感染の機会が減るビニル被覆後に発生した秋ランナーを利用する。また、定植株に負担がないように1株から1苗とする。

エ 親株の防除対策については、平成18年10月13日付け技術情報「イチゴ炭疽病の防除対策について」を参照のこと。

#### 2 イチゴのハダニ類

##### (1) 予報の内容

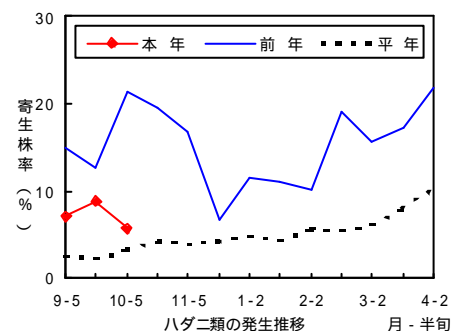
発生量：平年よりやや多く、前年よりやや少ない

##### (2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査結果（ ± ）

寄生株率 5.7%（平年 3.3%、前年 21.4%）

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く降水量は平年並である。（ + ）



##### (3) 防除上の注意

ア ビニル被覆後は降雨の影響がなくなり、乾燥すると増えやすくなるので注意する。ハダニは、はじめスポット的に発生し、地面に接した下位葉ほど寄生が多い。多発生後は防除が困難となるので、葉かぎ等の管理作業時によく観察し、発生がみられたら早めに防除を行う。

イ 防除は摘葉後に行うと効果的である。その際、葉裏に薬剤が十分にかかるようにする。

ウ イチゴ以外の植物にも寄生するので、ほ場内や周辺の除草を徹底する。

エ ハダニ類が寄生した摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。

- オ チリカブリダニ等の天敵を利用する場合は、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤を散布し、ハダニ類の密度を下げてから行う。
- カ 薬剤によってはミツバチへの影響があるので、薬剤の選定は注意する。

### 3 ハスモンヨトウ（野菜共通）

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

#### (2) 予報の根拠

ア 10月5半旬（10/20～25の5日間）のフェロモントラップの誘殺数（+）

筑紫野市 312頭（平年比135%）

筑後市 191頭（平年比97%）

行橋市 772頭（平年比316%）

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並である。（+）

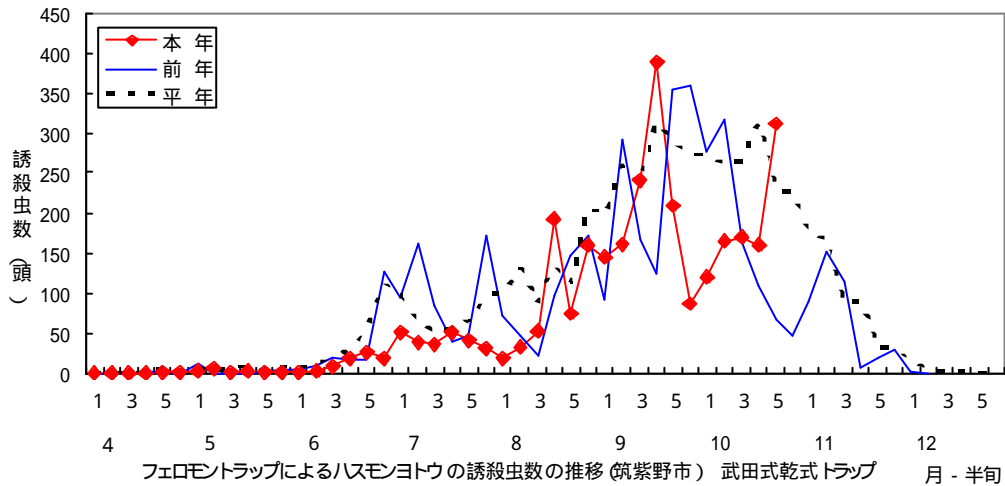
#### (3) 防除上の注意

ア 孵化直後から3齢幼虫期までに薬剤防除を徹底する。

イ 若齢幼虫は群生しており、かすり状の葉をみつけたら直ちに除去する。

ウ 施設栽培では、成虫の飛び込み防止のため、4mm目合いの防虫ネットを隙間なく張る。

エ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。



### 4 ミナミキイロアザミウマ（野菜共通）

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多い

#### (2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査結果（+）

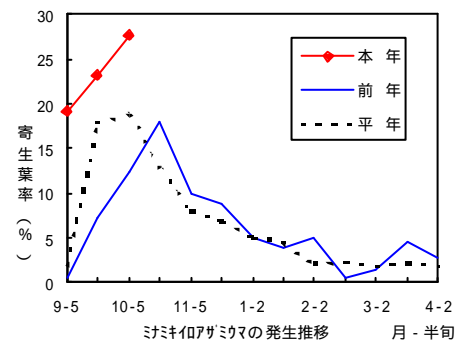
ナス寄生葉率 27.7%

（平年 18.8%、前年 12.4%）

ナス被害果率 2.6%

（平年 2.4%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年並である。（+）



(3) 防除上の注意

- ア 卵は葉の内部に産み込まれ、成幼虫の一部はガクの下、蛹は土中にいて、散布した薬液が到達しないため、発生後は根絶しにくい。ほ場内の発生状況をよく観察し、早期発見、早期防除を徹底する。
- イ 初発生は、葉脈沿いに現れる食害症状を確認して判断する。葉表では長さ2～3mmの細い白斑が葉脈に沿って連続して生じる。また、葉裏では3～5mmの大きさの銀白色に光る部分が葉脈沿いのところどころに生じる。
- ウ 葉表より葉裏への寄生が多いので、薬剤散布は散布むらがないように丁寧に散布する。また、薬剤の到達しない葉内の卵から幼虫が、土中の蛹から成虫が徐々に発生してくるので、それらの虫を対象に5～10日後にもう一度薬剤散布を行う。
- エ ほ場内外の雑草を徹底して除去し、害虫の生息、増殖源を絶つ。
- オ 本種はキュウリの黄化えそ病(MYSV)の媒介虫である。このウイルスはアザミウマ類が低密度でも伝染し、蔓延する恐れがある。キュウリでは、ハウスサイドや天窓等、施設開口部に0.4mm目合いの防虫ネットを設置し、本種の侵入を抑制する。また、紫外線カットフィルムの使用も本種の発生を抑制し、黄化えそ病の蔓延防止に有効である。

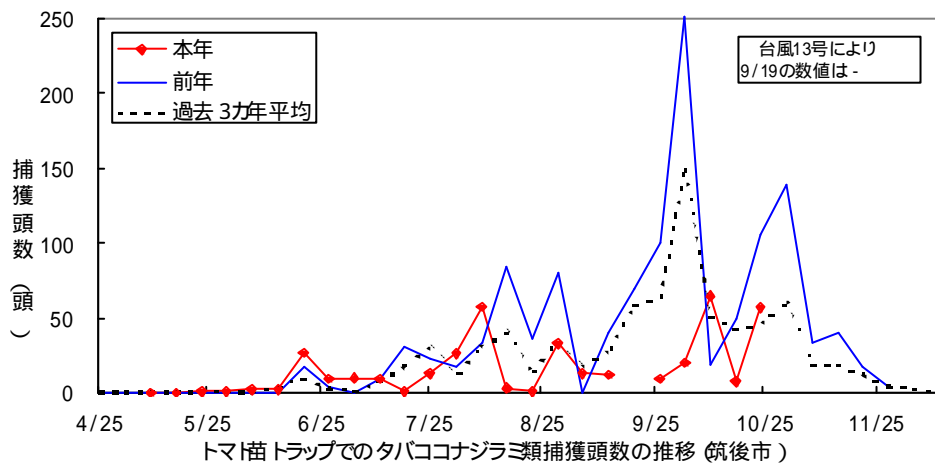
5 コナジラミ類(野菜共通)

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 10月5半旬調査結果(±)  
ナス寄生葉率 24.1%(平年 39.1%、前年 27.3%)
- イ トマト苗トラップでの捕獲誘殺数(10/18～24の7日間)(±)  
筑後市 57頭(過去3カ年平均 45.7頭、前年 106頭)
- ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年並である。( + )



(3) 防除上の注意

- ア ほ場内外の雑草の除去を徹底し、害虫の生息、増殖源を絶つ。
- イ 幼虫や蛹が寄生している下位葉を除去し、施設内の密度を下げる。
- ウ 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように散布する。
- エ 例年、11月中は野外での発生がみられるので、ハウス内への飛び込みに注意し、防除を徹底する。
- オ タバココナジラミ類(シルバーリーフコナジラミ、タバココナジラミパイオタイプQ)はトマト黄化葉巻病(TYLCV)の媒介虫である。ハウスサイドや天窓等、施設開口部に0.4mm目合いの防虫ネットを設置し、媒介虫の侵入を防ぐ。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況 平年比	発生予報		防除上注意すべき事項等
		平年比	前年比	
ネギ ヨイモジヨトウ	並	並	並	
イチゴ うどんこ病	少	並	並	ビニル被覆後から年内にかけて発病に好適となる。本年は、育苗期で発生が多く見られたことから、定期的な予防防除を徹底する。
アブラムシ類	並	並	少	
冬春ナス うどんこ病	並	並	やや少	
灰色かび病	並	並	並	
すすかび病	並	並	並	
冬春トマト 葉かび病	-	並	並	
キャベツ 黒腐病	少	並	並	
菌核病	並	並	並	
コナガ	並	並	並	
アブラムシ	並	並	やや少	
レタス 灰色かび病	並	並	並	
菌核病	並	並	並	
腐敗病	並	並	並	
野菜共通 オオタバコガ	やや少	並	やや少	<p>フェロモントラップによる誘殺数は平年より少ないが、イチゴ、キャベツほ場では発生が見られる。本虫は、中齢幼虫になると薬剤の効果が落ちるので、孵化直後の幼虫をねらって防除を行う。</p> <p>今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページ参照のこと。</p>

## 農薬の適正使用、飛散防止の徹底を！

全ての農薬の残留基準が作物毎に設定され基準値を超えた食品（農産物）の販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう、これまで以上に注意を払う必要があります。

### 1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数の使用基準を遵守する。

動力噴霧器、薬液タンクなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

### 2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

### 3 生産履歴の記帳

農薬使用の際は、作物、ほ場毎、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpjn.ne.jp/fukuoka>  
電子メール [kfok0301@sp.jpjn.ne.jp](mailto:kfok0301@sp.jpjn.ne.jp)